

ジェイン・オーステンの恋愛と婚約

宮崎孝一

ジェイン・オーステンは一七七五年十二月十六日に生まれ、一八一七年七月十八日に四十一年余の生涯を閉じた。

一生結婚しなかったが、しかし、一度の強烈な恋愛、それから一回の婚約についての話が伝えられている。

記述の便宜上、彼女が次々に移り住んだ土地を列挙すると次のようになる。

ステイヴントン	一七七五—一八〇一年
バース	一八〇一—一八〇六年
サウサンプトン	一八〇六—一八〇九年
チョートン	一八〇九—一八一七年
ウィンチェスター	終焉の地

これらはすべて、イングランド西南部の、互いに比較的近接した土地である。

ジェインの恋の話は、父親ジョージ・オーステン（一七三一—一八〇五年）が七十歳で牧師を辞めたのを機に、ジェインも両親、姉カサンドラ（一七七三—一八四五年）と共に住み慣れたステイヴントンを離れてバースに移った一八〇一年のことである。この夏、一家が南英シドマス海岸に遊んだとき、ジェインは一人の好青年に偶然出会ったが、この青年が彼女に強く惹かれた様子を示したという。彼女は、その人の名前も知らず、職業も分からなかったが、牧師らしいという感じは受けたようである。彼がハンサムで、

知的で、非常に魅力的だったので、ジェインの姉のカサンドラが、めったに人を褒めない女性だったにも拘らず、この青年を非常に賞賛し、ジェインの相手としてふさわしい男性だと考えたという。ジェインも同じ思いであつたらしい。しかし、二人が知り合つて二、三週間後、青年は掘よん所ない用事のためシドマスを離れなくてはならなくなつた。当然彼は間もなく戻つて来るものと期待され、その晩にはジェインとの婚約が成立するものと考えられた。ところが、その後間もなく姉妹に伝えられたのは、彼が急死したという、彼の兄からの知らせであつた。これがこの恋物語の余りにも呆氣ない顛末のすべてである。

この経緯についてのジェインの手紙は一通も残っていない。(彼女が元々一通も書かなかつたのか、あるいは、書いたのだが、後にカサンドラが他の多くの手紙と共に焼却したのかの何れかである)。ともかく右に見たことが、カサンドラがその晩年に甥や姪たちに断片的に語つたことに基づいたとされる現在分かつている限りの経緯である。

ジェイン・オーステンの婚約についての話は、右の恋愛談よりも、関わっている人々の数も多く、やや詳細にわ

たっている。この問題が起つたのは、右に見た恋愛の話よりも一年余たつてからのことである。一八〇二年の秋に、姉妹はバースから、前に住んでいたステイヴントンに一時的に戻り、父の跡を継いで牧師になつてゐる兄ジェームズ・オーステンの家族と共に滞在していた。そこから六マイルの所には、この地方の旧家で非常な財産家のビッグウィザー (Big-Wither) 家の邸メニードウン・パーク (Mandyown Park) があり、この家にはオーステン姉妹と同年輩の二人の娘キャサリンとアリーシアがいたので、前々から姉妹はダンスの催される折などよく往き来していた。そこでこの一八〇二年にも姉妹はこの邸を泊まりがけで訪れた。十一月二十五日、木曜日のことであつた。人工的で、落ち着いた趣のないバースの町を好んでいなかった姉妹にとつて、自然に囲まれたこの邸は快適であり、また、昔からの女友だちとの再会も楽しかつた。

この家の当主は、時に六十一歳のラヴレース・ビッグウィザー氏で、自家の不動産の拡張、充実を計り、公共事業にも熱心な人であつた。嗣子ハリスは時に二十一歳であつたが、極度に吃りで、また、体が異常に大きかつたという。身のこなしが鈍く、人々の会話に加わることも、ほ

とんだなかった。

彼に関して次のような逸話が伝わっている。ある夜彼が執事に、通常混合しないワイン数種でパンチを作って客たちに勧めるように命じた。一同がそれを飲んで顔をしかめたとき、ハリスは言った、「このパンチは皆さんと同様です。めいめいはよい人たちばかりなのですが、みんなが合わさると、こういうまずいものになるのです」。ハリスとしては精いっぱいウィットを發揮したつもりだったのであろう。

さて、一八〇二年にビッグウィザー家を訪れたときのジェインは二十七歳で、ハリスより六歳年上であつたが、ハリスは、ひそかにジェインに恋心を抱いたらしい。彼女の到着一週間後、ハリスは彼女に求婚したのであつた。(ちなみに、彼女が後に書く『説得』のヒロイン、アン・エリオットが昔の恋人ウエントワース大佐と再会し、やがて結婚するのは二十七歳のときである。ジェインの気持では、このくらいの年齢が、女性に結婚話が起る上限だと感じられたのかも知れない)。ハリスの求婚が行われたのは十二月二日の木曜日のことであつた。ジェインは当然、姉のカサンドラに相談し、その晩寝室に入るまでには、ハリスの求婚に承諾を与えた。

しかし、その夜、床に就いた後のジェインは輾転反側しなければならなかつた。自分の境遇を考えれば、父親が死亡した後は、一家の収入は極度に乏しくなり、彼女も、母親も、姉も貧窮に直面することは目に見えていた。結婚こそ考えられる最大の幸福に至る道であり、ハリスを受け入れないことは、自分としては愚かな、家族に対しても我儘な行動と思われた。しかし、困ったことに、ジェインはハリスを愛してはいなかつた。そうは言つても、ハリスはまだ若いのだから、その外見や感じ方、考え方が今後好転しないとは限らない。詩で歌われているようなロマンチックな愛などより、生活の現実をこそ見据えるべきではないか。彼女は既に二十七歳になっているのだ。このまま過ぎれば、老嬢として兄弟たちの厄介者になる運命が待っているのみにあつた。しかし、そうは言つても、今まで慣れ親しんだ家族、環境を捨てて、魅力を感じ得ないハリスと、新しい住居に住むことに堪えられるだろうか。経済的考慮のみが、感情をいつまでも抑えてくれる力があるだろうか。その他、凡百の論理的、非論理的な想いが、ジェインの眠れぬ一夜を去来したことであらう。そして十二月三日金曜日の朝、彼女はハリスに会つて前言を取り消したのであつた。

ジェインとカサンドラとは直ちにメニダウンを離れて、ビグーウィザー家の二人の娘に送られて、馬車でステイヴァントンに戻つて来た。そして、日曜に行うはずの説教の準備に忙しい兄ジェームズを促してバースまで送つてもらうことにした。メニダウンの付近は一刻も早く離れなくてはならないと感じたのであった。兄に対する事情の説明は道中で行うはずであった。

ジェインがハリスの求婚に応じたのが余りにも速かつたという印象を我々は抱かざるを得ない。また、それに劣らず、その承諾の撤回も余りにも速かつたという感じがする。承諾が速かつたのには、前述したように、彼女の置かれた境遇に関する考慮も作用したかも知れない。また、結婚に乗り気になれなかつたのは、彼女が既に物語を書く楽しさを知つていたからかも知れない。更にその奥には、一年余り前にシドマスで恋した青年のイメジが今もなお、消し難く残つていたことが、たとえ彼女は明確に意識しなかつたにしても、大きな力となつて働いていたのかも知れない。何れにしても、この婚約の破棄はジェインにとつて大きな懊悩を伴つたであろうが、強い勇気をもつて去就を決したことは立派なことだつたと言わねばなるまい。

この時の経験は、後にジェインが書く作品に、いろいろに形を変えて表われることになる。中でも『高慢と偏見』における、シャーロット・ルーカスとウィリアム・コリンズとの結婚、また、エリザベス・ベネットのダーシーに対する気持の揺れには、この時のことがはつきり読み取れるように思われる。すなわち、シャーロットは、形式的で事大主義のコリンズに対して、いささかの愛も感じてはいないが、自分の姥桜ぶりと、コリンズの牧師としての定収入とを秤に掛けた上で、彼との結婚に踏み切る。また、エリザベスは、ダーシーの宏壮な邸と豪華な生活ぶりには心を惹かれるが、それによつて彼の人柄の判断を大きく左右されることはなく、後に彼の傲慢と見える言動の底に潜む真摯な心情に触れて初めて彼の求婚を受け入れるのである。

また、ジェインの老嬢としての実生活が、当時通常であつたような経済的に惨めなものとはならず、多くの兄弟たちが揃ひも揃つて温かく彼女を援助してくれたこと、また、後には創作から得る収入も生活の助けになつたことは彼女にとって、また周囲の者たちにとつて幸せなことであつた。

なお、ハリス・ビグーウィザーは、この事件の二年ほど後に、北ハントの民兵軍中佐、ベディングトン・ブラムリー・フリスの娘、アン・ハウ・フリスと結婚し、十人の子供をもうけて一八三三年三月二十五日に五十二歳で死去した。

〔注〕 ジェイン・オーステンが一八〇二年までにものした試作のうち、主要なものは次の如くである。

1793-94 *Lady Susan*

1795 *Elinor and Marianne*

1796 *Sense and Sensibility*

1797-98 *Northanger Abbey*

参照

Park Honan: *Jane Austen, Her Life*, 1987.

Oliver MacDonagh: *Jane Austen, Real and Imagined Worlds*, 1991.

David Cecil: *A Portrait of Austen*, 1978.

Deborah Kaplan: *Jane Austen among Women*, 1992.

Elizabeth Jenkins: *Jane Austen*, 1938.

W. Austen-Leigh and R. A. Austen-Leigh: *Jane Austen, Her Life and Letters*, 1965.